

富來隆先生と『大分県史』近現代史を担当して

吉田 豊治

富來隆先生に直接御指導を仰ぐようになったのは昭和五十三年でした。県勢の飛躍的發展の基礎として、治世の大本である修史事業としての『大分県史』編纂の審議会委員と近現代篇の専門委員を委嘱され、史資料収集、執筆など多くの方の協力が急務であった。しかし県内の研究者は、当時八七号が刊行されていた『大分県地方史』にも、近現代史関係の論文は数編という実情であったが、その時期に出版された『大分の歴史』（大分合同新聞社）近・現代で、富來先生を中心に大分大学関係の先生や門下の方々が執筆されていた。

高等学校に勤務していたので、社会科の先生方との関係しかない私には、執筆には富來先生とそのグループの先生方に参加して頂かねばならなかった。大分大学の富來研究室に伺って御協力をお願い申し上げたところ、本当に気持ちよく引き受けて下され、安堵したのがつい昨日のように思い出される。

五十九年に出版された近代篇Ⅰのあとがきに編集責任者の先生が、「執筆陣の顔ぶれも現在の時点では最強のチーム編成である」と書かれ、平成三年全編完成に際して近現代篇専門委員として「近代史料の蒐集については中央に何度も出かける苦労が大きかった。史料にこんなに多大の精力を費して、あとの仕事はどうなるのか、どんな原稿になるかと心配し通しだった。……後世に残る立派な近現代史（六巻）が出来たと喜んでい」と述べておられる。御健康をそこなわれた中で私たちに大事な基本線を示して下され、さらに五十五年に発足した近代史研究会の例会にも殆ど出席され、指導を受けた面々が市町村史の近現代史部門を執筆し活躍している。

県立歴史博物館や大分市の歴史資料館に近代部門の展示がないように、まだ夜明け前の大分県近現代史の育成に、無くてはならなかった先生を失った事は本当に残念です。何とか私どもで頑張りたいと思います。最後になりましたが、謹んで御冥福をお祈り致します。